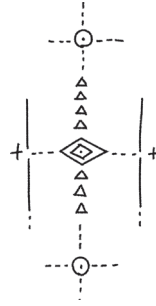


# COSMOS集



幼時より働くだけの農婦なり国の言ふまま風の吹くまま

寄りそうごとく

野 口 喜美江\*群馬

亡き夫の十八番の「昂」聞こえ来ぬ谷村新司が星になりし夜  
 コーラスで「いい日旅立ちうたいたりアラフォーのころアリスに惹かれ  
 たまもの手拭い、風呂敷山と積む戦後の姑がなしたるように  
 庭先に金の木犀香り立ち銀の穂すすき夕陽を反す  
 母の日の祝いの紫陽花二度咲きぬ娘がそつと寄りそうごとく

歌劇「ノルマ」

森 野 樟 子\*千葉

届きたる暦めくればあたらしき年のはじめは雪麻呂の歌  
 コロナ禍に中止されたる歌劇オペラなり三年ののちの開幕を待つ

信仰と愛と侵攻問う歌劇「ノルマ」の詠唱アリヤいたく身に沁む

コロナ禍を生きのびて今会場に響むあまたの「ブラヴィ」を聞く  
 ウクライナ、パレスチナはたベトナムが立ち上がりくる歌劇であった

カーブミラー

人 見 江 一\*神奈川

コスモスの先輩たちの言葉から歌人の父、人見忠を知る  
 大変な今日一日を労ったカーブミラーに映る自分に

焼酎は芋にしますか麦ですか 酔えば違いも模糊となるのに  
 苔の上に星座のごとく連なって青く輝く竜胆の花

大いなる怒りをぶつけ改札機叩いて過ぎる前をゆく人

鈴木 千登世選

「あすなる集」特選

イギリスと彼岸

高 橋 みどり\*イギリス

イギリスと彼岸の距離は近いのか かくもこまめに夢に来る母  
 大聖堂も古城もパブもある街に求めてしまふイオン、ダイソー  
 「イギリス」で他国の民が語るのは許されるのかガザの殺戮  
 十五時を過ぎる刹那のさびしさよ 日本が先に明日となりて  
 バスのない学生寮のバスルームに顔を洗えり便器のかたえ

じゃがいもを剥く

青 野 多都留 北海道

腰をかばひかばひて歩くくの字型このままの字の余生となるか  
 裁縫は出来ぬが繕ひ得意なり戦中戦後身につけし技  
 心臓も呼吸も何故か止まらない 止まらないまま八十五年  
 夫と経し六十年を思ひつつデコボコ多きじゃがいもを剥く

鈴木 竹志選

奈良の宿 佐藤 克子 新潟

幾年かけて改修したる只見線沿線の人ら手をふりくるる  
奈良の宿に訪ひきてくれし奈良の友に押し車の夫が付き添ひきたり  
喜寿すぎて中学の友と奈良の宿に言葉少なくハグしてをりぬ  
コート着る着ないを悩む晩秋に夫はブルゾンで囲碁に行きたり  
枯れ落葉巻貝のごとまろまりてカラカラと舞ふ秋の古町

天気 雨 高橋 梨穂子\*新潟

何回も見たからラストを知っているアニメ映画をもう一度見る  
ゆきだるまと台詞を持たない少年の別れのように秋の小雨は  
弾きすぎて実家で禁止された曲いま弾いたつて誰も怒らない  
図書館を本の博物館と言うひとと一緒に見る天気雨  
こんなにも薄っぺらいのにすたすと勝手にどこかへ行かない葉

双葉町 星野 尚子\*新潟

魚沼の山道ぬけて六時間双葉町に着き日本横断  
商店街ぬけた畑のそここに「帰還困難区域」の文字あり  
割れている窓ガラスから青空がのぞく空き家の十二年の日々  
外壁は白に静けさ塗り込んだ原子力災害伝承館  
切り取った匂いも音も感じます報道写真が遺す震災

十日夜 菊池 むつ江 長野

今もあせぬピロッド足袋のえんじ色・七文半の銀色小鉤  
ハローウィン奇しくも似たり古里の十日夜とをかんであのわら鉄砲と  
土手荒らす土竜たたきをまね遊ぶ十日夜のわら鉄砲

新藁に茗荷の茎をまきこめるあたりどよもす鉄砲つくらんと  
夕暮れて子らの遊びの叩き初めかまどに新米たき上がるころ

ソノシート 大沢 律子 岐阜

ブギウギを唄ひて父に叱られき敗戦五年目悔しからんや父  
父母よりも長生きをしてなほ今もおいしい空気をいただいてゐる  
旧姓で呼びくるる人ありてわあつと子供にもどりたくなる  
ソノシートのダークダックス聴きながらシヨール編みぬし若き日ありき  
たのしさをいつばい探して歩く野路アサギマダラや縞蛇にも会ひて

松尾 祥子選

手帳 奥村 幹男\*愛知

立冬は音もなく過ぎ堤防のぬすびとはぎは秋を攫いぬ  
エンジンの機嫌が今朝は斜めなりお前も冬を告げるかチェンソー  
自転車に乗りたる孫は見えて見てと頭の黒ヘルメット  
手帳をば使わずなりぬ年末の手帳売り場の前そつと過ぐ  
疑問符は言葉にすべし沈黙は不完全なるコミュニケーション

風呂吹き大根 柴田有里\*愛知

献立を凝る気もなくグツグツと厚さ五センチ風呂吹き大根  
受け取った野菜の中に紛れ込む母手作りの瓜漬ひとつ  
秋の日の夕闇早く外遊びできぬ子たちの不満がぼろり  
宿題の漢字ドリルを埋める文字書き順無視の効率重視  
書き順の判定するはタブレットアプリの中の見えない先生

女優のこころ 藤本満里子 兵庫

九十二の鶴江さんまた笑はせる杖つく王子様あらはれるかもと  
土手を染め日本の秋にとけ込みてゆらゆらゆらく背高泡立草  
人がこはくパニックなんだ僕たち熊は餌がほしくて下りて来ただけ  
おもはずに「女性専用」車に乗りぬ痴漢に会はぬシルバーなのに  
色づきし落葉松並木を背を伸ばし女優のこころに抜けてゆきたり

雷 丘 河本洋子\*奈良

春日なる三笠の山いづちのなかの山裾に東大寺の鴟尾金に輝く  
秋風にすすきの穂先揺れゆれて合間から見雷いづちのなか丘  
柳生へとつづく道の辺右、左たわわに実る柿茜色  
大柳生剣聖の里道場に竹刀の音の鋭く高き  
町角の酒屋に一步踏み込めば各地の銘酒ずらりと並ぶ

カメムシ 畑都\*鳥取

グラウンドゴルフの選手を依頼さる一番若いと喜寿なる我は

「コスモス」に採られた歌を記さんと緑の表紙の手帳を買いぬ  
初物の並ぶ秋刀魚は瘦せっぽち背丈の順に三匹買いぬ

カメムシが夫のパジャマを這い出して昨日の諍い一気に解消  
実直な父は胃癌を疑わず潰瘍のまま逝つてしまいいぬ

大野英子選

威風堂々 井上喜美子\*山口

伊勢エビを食べるツアーの老女五人なんだかんだと完食をする  
腰曲げて歩く道の辺冬空に皇帝ダリアは威風堂々

庭の木に見事に張られし力作を蜘蛛にはすまぬがほうきで壊す  
冬空に朱の色濃くする富有柿 高枝バサミを空に伸ばしぬ  
なにゆえに老後がこんな忙しい 今日はお医者のはしごをしたり

小人のドラム 江崎玲子\*福岡

雲ひとつない秋空を写しとる磨いたばかりの玻璃窓の上に  
真夏日の立冬過ぎて氷張る寒さの訪れ秋はいずこへ  
懐かしの旧姓愛称飛び交いぬ学友と祝う還暦の月  
心エコー小人がドラム叩くようドクンドクンと命を刻み  
値上がりをすればする程増えてゆく消費税という名の税収

秋 茗荷 浜田敬子 福岡

冬布団の準備はじめし母の側そばら集まりて真綿広げし  
りつばなる葉の大根が門扉下に置かれてありぬ土つきのまま

梅の木の下草むらの秋茗荷きのふ80けふ8個採る

秋茗荷水洗ひして陰干しし甘酢に漬けてひと安堵する  
酢に漬けし茗荷の色のうす桃を「きれい」と言ひし友に分けやる

黄色 水晶 福田 春子 福岡

参拝の記念になるや室生寺の片手念珠の黄色水晶

長谷寺の若き僧侶の下駄の音、登廊をゆくからからからと

大和路の秋の日暮れを寄り道し「吉野拾遺」といふ葛湯を買ひぬ

振袖と袴の子らを囲み撮る春日大社に言語さまざま



田中 愛子選 「その二集」特選

砂 浜 大桃 小やゑ 北海道

うち寄する波に消さるる波のあと常に上書きの砂浜さびし

ゆらゆらと桜紅葉は吊り下がりに立秋のひかり楽しみてをり

手のひらに美しき巻がら残しみて釣船草の種はじけゆく

本読みて漢字のルビに指開く スマホの拡大動作後のわれ

石狩の長さ砂浜その先に遠くかすみて雄冬の岬

素麺が「煮麺」となり温かし大和路めぐる旅を戻りて

荒ぶる波 石本 洋子 佐賀

念願の土佐北川のモネの庭入園券を記念に仕舞ふ

手摺りなき佐田沈下橋真ん中を夫と手繋ぎゆつくり渡る

夕迫りドド、ドド、ドドと桂浜荒ぶる波が竜馬想はず

「聞こえてる？」知らぬ顔する夫の肩ポンと叩きて新聞渡す

金婚の記念撮影共に付ち夫が手をやるわが右肩に

さみしき夜 水鳥 葉子 茨城

小春日に車椅子の母押しゆけば野道に点る烏瓜かな

勝ち負けはすでにわからぬ老母が条件反射で出すゲーチョコキパー

たはむれに百人一首の上の句を言へば応へる母よ愛しも

〈恋と恋〉見誤りたる老眼はときめく心隠してゐたり

留守録に残した母の声ありてさみしき夜は耳にあてたり

十一月の空 谷川 恵 埼玉

参道をゆけばさんさいななさいの着物が跳ねてあちこちに咲く

紅葉と黄葉とまだあをき葉と混ざりて十一月の青空

磯部焼きの海苔は切れるはうがいに参道沿ひの変はらぬだんこ池の水全部抜いたといふ記事を見つけてふつと亀を思へり  
パキパキの唇に塗るクリームの色に迷へる日曜の朝

こがねの螺旋 谷 真樹\*神奈川

欲深き者には秋の冷たさをくれてやろうかと半珈思惟す  
浜なしの皮むいてゆくすると秋はこがねの螺旋をえがく  
梨を割るざらめのような半身から汁は滴りまな板をぬらす  
強かな花だと思つていた萩の次から次へと弱音がこぼれる  
仕事倦む人のキーボード叩くごとと黄葉のうえに雨粒は落つ

水のの番 富永 弘 東京

老体の帰るを待ちてセンサーが玄関までの足許照らす  
さらし鯨のすぢを噛むなり三か月かかりし奥歯の治療終はりて  
酒のめぬ父が晩年養命酒飲みぬしことを思ひ出したり  
蚊の襲ふモーター小屋に徹夜して水の番しき父に代はりて  
駅前ポストのかけにこほろぎの鳴きてふるさと遠くなりたり

田宮 朋子選

赤 い 傘 長谷川 綾 子\*新潟

見上げれば空いっぱいのうろこ雲今日の夕餉はサンマがいいな  
秋雨に世界はすべてグレーゾーン赤い傘一つぽつと色づく

青空にツグミの羽根でおおらかに描いたような白きすじ雲  
何気ない友の言葉が渦巻けば掻き消すようにキャベツを刻む  
秋風に羽化せし蝶は震えつつ生きんと決めて羽ばたきはじむ

館 こ 屋 梅 沢 佳 子\*静岡

電照菊柩の夫の逝く道を照らせと喪主は足元に置く  
藤袴アサギマダラの思い出を語るや風に揺れつつ咲けり  
まだ暑きプラットホームに立つ朝秋あしたの気配の風は過ぎゆく  
隣家の館こ屋の音その匂い目覚しとなり五十年経つ  
ツンとした吊り目の白鷺丸き目の雀横切る秋の農道

秋 天 池 田 あつ子 愛知

水路へと夕日まつすぐ差しこめば火元のごとく水面は燃ゆる  
水差しに空き地の野菊摘みて挿す絵柄の二羽の兎遊べと  
秋天を力まかせに押し上げるタワービル見る旅人として  
石路いしぢのはな茶の花しるく灯りつつ冬の支度を無言で急かす  
変はりなくお過じょうびごしですかと言ふやうに尉鶴じゆうひつ来る小春の日和

スナーク狩り 田 原 五 郎\*京都

争いは命にまつわる性なのか絶えることなく戦は続く  
ハロウイン仮面をかぶり歩く街人は仮面を死ぬまでかぶる  
何のためこの世に生を受けたのか似てると思うスナーク狩りに  
生きている役目をひとつ果たせたか写真に娘と孫並びおり  
ひさびさに同窓会のさそいあり現実はなれ不思議の国へ

言えないこと 大池 アザミ\*兵庫

ダルク 川村 ら\*鳥取

気に入りの小花模様のワンピースエコバッグにしてまだ手放さぬ  
三人の子ども次々家を出て今夜は誰のベッドで寝ようか  
あんなにも大切だった傘だけど壊れて捨てるときの清しさ  
今もって言えないことも多くありしみじみ更ける同窓会の夜  
書き殴りの単語の並ぶ日記だが当時の気持ち鮮やかに踊つ

影山 一男選

昭和に戻る 松岡綾子 香川

蛾 加藤修 一兵庫

地に落ちて枯葉にまみれし大黄蛾羽根震はずも風に吹かるる  
土の上もがく黄色蛾押し寄せる季節の流れと戦ひ切りぬ  
木枯らしのひと荒れ後の蛾の骸末枯の草むらに戻しつ  
次々にこの世の者でなくなりぬ道標なりし歌の担ひ手  
この犬をおなかを撫でて溺愛す顔を知らざる吾子のごとくに

今日の青空 浦木 妙子\*鳥取

思い切りロイター板を踏み切つて飛び込みたくなる今日の青空  
北風に髪をなびかせ幼子は逃げる枯葉と鬼ごっこせり  
シューマイの種をボールで混ぜながらさつきの夫の言い種気になる  
どうみてもやっぱり私は悪くない海老入りシューマイ程よく仕上がる  
小春日にタイヤ交換せし夫の脱ぎたる軍手の確かな丸み

小鼠と小さき蛇が同居する穀蔵を掃く音たてぬよう  
新米を産土神に差し上げて稲作曆を閉じる宵宮  
ダルクではご飯はいつでも食べてよしクスリのことを忘れるために  
穫れた年わからぬ米ものほらせて一食一皿ダルクの食卓  
出荷しても買い叩かれる古米ならダルクへ送らん九十キロを  
ほうれい線ふかくなつてる自己像を「上書き」できずマスクで隠す  
七五三祝ふ児のゐて砲弾におびえる児のゐて この地球はも  
大玉の花火の光と音のやうかなりズレてるあなたとあたし  
君のゐる海の方かうへ羽根広げアサギマダラになりて飛びゆかん  
蒸しパンの菌につく食感ロバのパン硬貨二枚で昭和に戻る  
まだ敵はんよ 春野直子 熊本  
暖かなひだまりのごとき姑逝けり金木犀の花ふる秋日  
秋の日に百一歳で逝きし姑その優しさに想ひを馳せむ  
お妣さんあのふわふわでほのあまい炒りたまごだけはまだ敵はんよ  
傾きし陽に染まりたりくれなるに花水木もみぢ秋深まりゆ  
夜半より音たてて降る秋時雨 義母亡き冬のはじまりのおと